トピックス

カーショー『ヒトラー』(1) を読む

木村靖二

1.

原著がイギリスで1998/2000年に公刊されたとき，筆者は先ずその重厚さに圧倒された。一巻目は800頁，2巻目は1000頁を超え，2002年にDTVから出版された独訳にいたってはそれぞれ1000頁と1300頁であり，さらに2008年に出版された縮刷版ですら1000頁に達する。本書の膨大な注や利用資料・参考文献を一瞥し，またカーショーのそれまでの研究歴を併せて，本書がナチス・ドイツ史研究一般に大きな影響を与える画期的業績であるばかりか，1918～1945年の両大戦にまたがる時期のドイツ政治社会史でもあることを理解した。それが本書が大部にならざるを得なくなった理由であろう。優れた研究書について，「出版された時点ですでにその分野でその後の研究の出発点とでもいうべき古典の地位を占めることが約束されている」という言葉があるが，本書はまさにそれにふさわしい力作である。

ヒトラーの伝記は，古くはドイツのハイデン(2)，第二次大戦後のイギリスのアラン・ブロック，さらに西ドイツのフェストなどの著書が有名で，日本でも後者の2著は比較的早い時期に邦訳され紹介された(3) が，最近の専門書出版事情を考慮すると，本書の翻訳はかなり難しいだろうという感想を筆者はもった。無精な筆者は文献に直接感想や注目すべき箇所の指摘を書き込み，概要は簡単なメモで済ますことが多い。しかし本書に関しては，英・独版を並べ（原著英版には簡単なグロサリーが付いているが，ナチス・ドイツの組織・官職・階級・地名などの確認には独版が不可欠であった），かなり詳細なメモを作成したのも，本書が長く基本文献となると確信したからである。それだけに白水社が翻訳を決断し，石田勇治氏の監修のもとに，訳者として優秀な研究者を得て出版したことは敬服にあたいすることで，近現代ドイツ史研究者一般のみならず，広く20世紀論（独裁論・大戦論・政治体制論など）・現代社会論を考える読者にも勧めたい。とりわけ若い

（1） イアン・カーショー（川喜田敦子訳）『ヒトラー（上）傲慢――1889-1936』（白水社，2015年），本文611頁＋注・参考文献190頁；同（福永美和子訳）『ヒトラー（下）天罰――1936-1945』（白水社，2016年），本文870頁＋注・参考文献274頁。ともに石田勇治監修。

（2） Konrad Heiden, *Adolf Hitler,* 2 Bde., Europa-Verlag, 1936-37.

（3） アラン・ブロック（大西尹明訳）『アドルフ・ヒトラー（1・2）』（みすず書房，1958-60年）；ヨアヒム・フェスト（赤羽龍夫ほか訳）『ヒトラー（上・下）』（河出書房新社，1975年）。

世代の人々には，分厚さにたじろがず，是非挑戦してほしいと願っている。

翻訳大国である日本では優れた翻訳も多い反面，特に歴史書については，当該言語の専門家であっても，対象に関する基本的なテクニカルワードや初歩的歴史情報に疎いと思われる訳が少なくない。著名な出版社の翻訳にもかかわらず，その文献の専門分野での評価や位置づけ，著者についての簡単な解説すら書いていない（書けない？）翻訳も見かける。その点で，本書の翻訳は読みやすく，専門用語についても信頼できる点は高く評価でき，両訳者の労を多としたい。もっともこの大部の著書の翻訳であれば，見落としや誤解が起こることは避けられないが（いくつかの誤解については末尾に挙げておく），それは全体として本書の翻訳の高い水準を問題にするほどのものではない。

原著は出版以来十数年を経ている。ナチズム研究は国際的に多くの研究者が参加している分野で，新史料の発見，研究者の世代交代や政治社会状況の変動による研究関心と重点の変遷が多く，激しい論争も多い。このことは比較的新しい研究文献でも，問題設定，分析手法，歴史的評価などの点で，いわゆる「賞味期限」が短くなり，修正が必要になることが少なくないことを意味する。ここ十数年にも新しい研究上の成果は多く，問題関心の移動もあるので，本書も部分的には加筆・修正されるべき箇所もある。しかし，全体としては現在もこの分野では必読の最重要文献であり，今後も長く参照され続ける業績であることは間違いない。ちなみに最近出されたイギリスの学生向けの標準的なヒトラー略伝の巻末参考文献解題では，一応ブロックなど従来の一連の伝記も紹介しているが，「もし“決定版”という名にふさわしい文献を挙げるとするなら」として本書を指定し，「その後の研究者のほとんどが本書の恩恵を受けている」と特記している(4)。

本書に気圧されたのか，本格的なヒトラー研究は10年以上出されなかったが，ようやく最近になって学術的なヒトラー伝の大著がドイツで相次いで出版された。いずれも本書を意識して，なぜまだ新しいヒトラー伝が必要かの弁明や説明から書き始めている。2013年に出版されたフォルカー・ウルリヒの『アドルフ・ヒトラー』は二巻本の予定で(5)，現時点ではまだ一巻だけだが，1000頁を超える分厚いもので，すでに英訳版もあり，第二巻も近く出版されるので，この書評が掲載される頃にはすでに刊行されているかもしれない。続いて2015年には，ヒンデンブルクの伝記で知られるピタが『ヒトラー――政治家・総司令官としての芸術家』と題するやや特異な観点からのヒトラー解釈を提起した著書を公刊した(6)。これも850頁の本である。さらに，ユダヤ人殺害政策に関する大著を著し，

（4） Michael Lynch, *Hitler,* Routledge, 2014.

（5） Volker Ullrich, *Adolf Hitler. Biographie. Bd.1; Die Jahre des Aufstiegs 1889-1936,* S. Fischer, 2013.

（6） Wolfram Pyta, *Hitler. Der Künstler als Politiker und Feldherr,* Siedler, 2015.

その後ナチの有力指導者の伝記研究に転じて，ヒムラー，ゲッベルスの伝記を発表したペーター・ロンゲリヒが1300頁のヒトラー伝を出版した(7)。

ウルリヒは，フリッツ・フィッシャーのもとで学位を取り，その後「ツァイト」紙の政治文献欄を担当しながら，多くの著作を発表してきた。なかでも1997年に出版された第二帝政の通史『苛立つ大国』(8) は，今もこの分野の基本文献の一冊である。彼のヒトラー伝は，関連研究の全体動向を見渡し，優れた研究成果をわかりやすい総合的通史にまとめるという彼の長所が発揮されたもので，文書館史料にも目を配っているものの，広く一般読書者層向けの性格が強い。とはいえウルリヒも最初の研究史の部分で，カーショーの業績に「意図派対機能派の不毛になった論争」に決着をつけたとして高い評価を与えている。この三書のなかでは，ロンゲリヒの研究がもっとも注目されるべきである。ロンゲリヒも自己の新著に関するインタビューのなかで，「フェストの著書はよく書けているが，すでに過去のものになっている。決定的に重要な文献は，すでに出版から15年も経っているものの，イアン・カーショーの二巻本であり，私にとってこれが挑戦の対象であった」と語って，カーショーの本書が自著の出発点であることを明言している(9)。

以下では，これらの新しいヒトラー伝の主張を念頭に置きながら，カーショーがどのような点で従来の研究を新しい段階に押し上げたのか，従来のヒトラー像をどう変えたのか，ナチ社会のダイナミズムをどう説明しているのかなど，いくつかの主題に絞って見ていきたい。

2.

ナチス・ドイツ史の研究者にはカーショーの経歴や業績は周知だろうが，最初に彼の履歴をごく簡単に記しておく(10)。

カーショーは1943年生まれ，最初はイギリスの中世史専攻で，オックスフォード大で中世の修道院研究で学位を取り，マンチェスター大学の中世史講師となった。70年代はじめ，中世の農民研究調査のためドイツを訪問した経験から，彼

（7） Peter Longerich, *Hitler. Biographie,* Siedler, 2015.

（8） Volker Ullrich, *Die nervöse Großmacht. Aufstieg und Untergang des deutschen Kaiserreichs 1871–1918,* S. Fischer, 1997.

（9） „„Die Auseinandersetzung mit der Figur ist in keiner Weise abgeschlossen“, Interview mit Peter Longerich über seine neue Hitler-Biografie“, *Boersenblatt,* 19. Nov. 2015, http://www.boersenblatt.net/artikel-interview_mit_peter_longerich_ueber_seine_neue_hitler-biografie.1045871.html （2016年7月22日閲覧）

（10） カーショーはいくつかのインタビューで自分の研究歴を詳しく語っている。Wikipedia（イギリス）のカーショーの項にはよくまとまった彼の経歴と研究の要約があり，インタビューのリンク先も載っている。以下ではこれらを参照している。http://en.wikipedia.org/_Kershaw （2016年8月26日閲覧）

の関心は近現代ドイツ史研究に向かった。一国史研究のなかで対象の時代や主題を変えるのはよく見るが，彼の場合はかなり珍しい専門分野の転換で，その意味で遅れてきたドイツ現代史研究者といっても良いだろう。70年代半ばミュンヘン現代史研究所のブロシャートの指導の下に開始されたバイエルン・プロジェクトに参加して，ナチ時代の世論研究をまとめ，ハンス・モムゼン，ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーら当時の新鋭研究者とも交流して業績を上げ，日本でも1993年に『ヒトラー神話』が，99年には『ヒトラー――権力の本質』が翻訳されている(11)。また，ナチス・ドイツ史をテーマにした人なら，ナチズム研究の研究史と重要主題と展望を整理し，版を重ねた彼の『ナチ独裁制』はおなじみであろう(12)。

カーショーは主に本書の功績で2002年にナイト爵位（サー）を授与され，サー・イアン・カーショーと紹介されることが多い。なお本書のいわば補遺に当たるものとして『終焉――ヒトラー・ドイツの抵抗と破滅 1944-45』(13) がある。

(1) 方法論と史料基盤について

本書上巻の冒頭にある序文とヒトラー省察に簡潔に記されているように，カーショーはもともと歴史叙述の方法としての伝記には懐疑的であった（上：7-28）。しかし，ナチ社会や政治構造への関心を深め，ヒトラーの中心的役割を認識した結果，意図派（伝統的伝記研究との親和性が強い）と機能派（有力支配集団の競合による政策決定を軸に分析する）の論争に距離を置き，両者を統合する分析と叙述手法に向かった。本書では，ヴェーバーのカリスマ概念を軸に，ヒトラーが同時代の政治・社会状況との相互作用のなかで，「指導者」に成長し，彼への権力集中によってナチ党が「指導者」政党に変容する過程を明らかにしている。さらにナチス・ドイツ成立後には，ヒトラーは交代のきかない権力者の地位を固め，ナチ諸組織内や国家の行政機構内に独特の行動原理を浸透させ，それによってナチ支配体制の政治的・社会的ダイナミズムを引き出し，同時にそれが既存の国家機構を溶解させていく，というナチス・ドイツ史を見通す大きな構図を提示した。

カーショーがブロシャートやハンス・モムゼンなど機能派の歴史家に学び，

---

(11) イアン・カーショー（柴田敬二訳）『ヒトラー神話――第三帝国の虚像と神話』（刀水書房，1993年）［なお，同訳書ではカーショーはケルショーとなっている］；イアン・カーショー（石田勇治訳）『ヒトラー――権力の本質』（白水社，1999年）。後者には本書の基本的枠組みが提示されている。なおカーショーの1980年代以降の関連論文をまとめた本があり，役に立つ。Ian Kershaw, *Hitler, the Germans, and the Final Solution,* Yale University Press, 2008.

(12) Ian Kershaw, *The Nazi Dictatorship. Problems and Perspectives of Interpretation,* Hodder Arnold, 1985 (4 th Edition: 2000).

(13) Ian Kershaw, *The End. The Defiance and Destruction of Hitler's Germany, 1944-1945,* Penguin, 2013.

ヴェーバーのカリスマ支配概念を適用していることなどから，欧米の書評や紹介の中には彼を機能派の一人と位置づけ，本書もその視点から理解しようとする傾向も散見される。しかしこれは正確ではない。伝記研究自体，機能派の忌避するところであったし，「総統の意をくんで行動する」原理は，膨大な一次史料の調査で見出したナチ党幹部の講演の一節から，彼が見出したものであった。なによりも伝統的歴史記述であるクロノジカルな叙述形式を採用し，社会科学的概念を多用せず，広範な史料の徹底した史料批判を重視する姿勢は，伝統的歴史学の系譜に属するといってもおかしくない。日本でも歴史叙述の方法論や概念を重視して評価する傾向がなお強いが，研究の評価は，方法論や学派の分類からではなく，具体的な歴史記述の内容から判断すべきという原点を忘れてはならないだろう。

本書が従来の研究を乗り越えることができた理由に，新史料の利用による史料基盤の飛躍的拡大がある。カーショーも認めるように，これは東欧社会主義圏の崩壊にともなう旧ソ連・東欧諸国所蔵の膨大な，しかも未知のナチ関係文書群が利用可能になったという幸運な状況が大きい。とはいえ，これらの新史料をヒトラー研究に結びつけて活用したのは，カーショーが最初であったことも見逃してはならない。本書では特にゲッベルスの日記を多く利用しているが，これもまた旧ソ連で発見された史料の一つである。そのほか，ユダヤ人殺害の全体像，スラヴ系諸民族への迫害・食糧など資源収奪の全容が判明したのも，新史料を利用した成果であり，それによってヒトラー・ナチスの反ユダヤ主義などの人種差別イデオロギーの重要性の再評価や，ドイツ国民の大戦や占領支配への能動的協力が指摘され，ナチ社会の実態が新たな研究上の焦点になり，大きな論争も起こった。本書もこれらの成果を利用しており，ナチス・ドイツ研究の新潮流に棹さした研究成果といえる。

(2) ヒトラーの青年時代の位置づけ

本書が，従来のヒトラー伝を大きく修正させた部分の一つに，第一次大戦終了以前のヒトラーの20代半ばまでの青年期，特に彼のウィーン時代での体験の評価がある。これまではこの時期をヒトラーの反ユダヤ主義・反マルクス主義などの基本的政治思想・世界観の萌芽期あるいはその形成期とする解釈が有力であった。この時期のヒトラーに関する史料が少なく，ヒトラーの『わが闘争』の記述や数少ないヒトラーの知人の回想記に頼らざるを得ない事情がそうした判断を支えてきた。

カーショーはここでは徹底した史料批判をもとに――歴史研究のお手本となる厳密さである――，思想形成期説を否定し，彼が社会の落ちこぼれ的存在に過ぎず，とても政治的構想を云々できるような将来の展望を持ちえない境遇にあったことを明らかにした（上：77-96）。ヒトラーが反ユダヤ主義的感情を持ったとしても，それは当時のウィーンの平均的ドイツ系市民の間にあった反ユダヤ主義・

反スラヴ民族感情を超えるものではなく，その後のミュンヘンでの生活や第一次大戦での軍務体験中にも，明確な反ユダヤ主義的言動を確認できないことを調べあげ，『わが闘争』の記述の欺瞞性を明らかにした。少年期体験の影響ということであれば，むしろチェコ人への敵意が強かったことも指摘されている（上：91，第2章注295）。歴史的人物の思想やイデオロギーの形成源流を求めて，青少年期に遡って解明する手法は，ヒトラーの場合には適用できないということである。カーショーは縮刷版ではウィーン時代の部分を削除している。

これを仮に「断絶説」とよんでおけば，ロンゲリヒもこれを受け入れており，この時期については前述のヒトラー伝（脚注7参照）の冒頭のプロローグのなかで「無名の人（Ein Niemand）」の表題のもとにほぼカーショーの記述を略述するにとどめている。それすら，ある書評ではもう判っていることを改めて書かなくてもよいのではと批判されている(14)。もっとも，一方でピタのようにヴァーグナーに陶酔し，建築家気取りのウィーン時代の「芸術家」ヒトラーを重視する「連続説」もあるが，カーショーの結論は現在ほぼ承認されていると言えるだろう。とはいえ，この時期に形成されたヒトラーの不規則な生活態度，独善的で社会性に欠ける特徴的性格は，後年権力を握っても，ほぼ最後まで変わらなかったことは確認されている（上：76-77，554-555，下：66-68，429-431，527-528）。

(3) 大衆扇動家・運動指導者と長期ヴィジョンの確定

こうしてカーショーは，ヒトラーの政治活動や世界観の形成を，1919年後半の時期に設定する（上：第5章）。復員後も戻るべき家や職もないヒトラーは，20年3月まで軍に留まったが，その間にヒトラーは軍の反革命教育活動の講師に採用されて大衆扇動能力を認められた。同時にその過程で彼は反ユダヤ主義も身につけた。カーショーはドイツ革命後のバイエルン州，特にミュンヘンの反革命・反ベルリン・反ユダヤ主義感情の台頭と，州政府・軍がそれを支援するという特殊な政治社会環境の重要性を強調する。大衆政治時代に入りながら，伝統的政治勢力には大衆に直接働きかけ，動員できる大衆扇動・宣伝力も適任者もなく，それを担える新しいタイプの活動家が必要になった。こうして大衆扇動指導者の期待と指導者不在という現実の狭間に，ヒトラーとナチ党が活動できる政治空間が生まれ，以後彼らは反共和国的保守勢力の後援下に勢力を拡大していく。ヒトラーが政治に入ったのではなく，政治がヒトラーに入ってきたのだと，カーショーは評している（上：141）。

その際カーショーはヒトラーの個人的能力を軽視してはいない。大衆扇動・動員力は民主主義政治では不可欠の要素の一つであり，それを誇示して党内での対

(14) Ulrich Herbert, „Der alte neue Diktatur“, *Zeit Online,* 24. Dez. 2015. http://zeit.de/2015/50/adolf-hitler-biographie-peter-longerich/komplettenansicht （2016年7月22日閲覧）。もっとも，ヘルベルトは読者層を広げるためには仕方がないとは認めている。

抗馬を追い落とし，全てか無かという二者択一論法で自説を押し通す彼の基本姿勢の力量を認めている。しかし，それもヒトラーの過激な演説や主張を強固な政治的信念や熱意の発露と受け取る権力者や市民層がいて，初めて政治力になる。カーショーはこの両者の相互依存関係を重視するのである。彼はヒトラー一揆後の司法や政府の対応如何では，ヒトラーの政治生命を絶てる多くの機会があったこと指摘して（上：447），この関係の意義を確認している。一揆裁判の法廷での無制約の弁論，反逆罪に対する軽微な判決，刑務所での寛大な処遇（『わが闘争』をまとめたのは服役中である），検察当局の反対を押し切った早期の保釈，オーストリア送還の断念，政治活動再開の認可など，このうち一つでも違っていれば，ヒトラーのその後の状況は大きく変わったはずという。

一方で，危機や逆境をプラスに転ずるヒトラーの判断や行動力にも注目している。裁判では，惨めな敗北者を裏切られた犠牲者・行動の人に逆転させ（上：239-242），服役期間を綱領的世界観の整理に当てて，反ユダヤ主義に新たに東方への領土拡大を加えた未来ヴィジョンを完成させ（上：265-276），1920年代後半の党勢停滞期・公開演説禁止期をナチ運動の有力指導者や地域の中堅カードル層との人的関係の緊密化に利用したことなどがそれである（上：287-305）。この過程で，ヒトラーは競合する相手がいない唯一の急進的反共和国運動指導者と認められる一方，党幹部との日常的接触を最小限にして距離をおき，党内でヒトラー神話成立への道を拓き，ナチ党を新しい指導者政党へと転換させた（上：321-329）。

なお，カーショーがヒトラーのヴィジョンと戦争との不可分の関係を指摘したことも重要である（下：35-38，198-201など）。ヒトラーのヴィジョン実現には，戦争という暴力の全面的展開状況が不可欠の前提なのである。ヒトラーが39年に第二次大戦を始めなければ大政治家になっていたのに，という戦後聞かれる評言は，ヒトラーがヒトラーでなければ良かったという願望と同義なのである。

以上のように，1933年のヒトラー政権までのカーショーの説明はきわめて説得的で，また当時の政治状況の理解についても貴重な示唆を含んでいる。

(4) ナチス・ドイツ下の動員・統合のメカニズム

ナチス・ドイツでは，ヒトラーは党務からはほぼ離れ，外交と軍事，さらに第三の「民族純化」の領域（ユダヤ人・心身障害者の「除去」）に専念した。自己の権限を制約したり，ヴィジョン実現を妨げるいかなる試みや動きも阻止する一方，重大な決定を先延ばしにする傾向，重要な命令や指示を口頭で伝達する方法を好むヒトラーの執務スタイルが，国家行政機関と党組織間の軋轢を生み，権限や実行機関のカオス状況と国家行政機関の溶解を招いたことは，本書でも繰り返し指摘されている（上：551-561，下：348-353，452-454，592-602など）。にもかかわらず，ナチ体制は全体として最後まで機能し，大多数の国民は末期まで任務を果た

している。それは何故なのか，ナチ体制のダイナミズムを生み出すカードル層の能動的行動を可能にした動機が何であったのかは，ナチ支配下の社会をナチスの監視・抑圧と国民の順応・服従の二分法で説明する全体主義的ナチス・ドイツ観が否定されて以後，研究者の主要な関心となった問題である。

カーショーの最大の功績は，それを政治エリート・党カードル層の「総統の意をくんで働く」というメカニズムにあることを解明したことにある(15)。これは，命令や指示を待機する消極的・受動的姿勢ではなく，ヒトラーの意向・要望を察知し，自ら積極的・能動的に行動して，その結果の評価は最終的にヒトラーの裁定に委ね，ヒトラーの真意を確認する行動原理である。それはヒトラーの意向自体を法とし，行政機関や党組織にヒトラーの意図に沿った即効的手段の案出と実行を競合させるダイナミズムを生み出して，同時に最高決定者としてのヒトラーの地位を一層強固にする機能をはたしたとカーショーは指摘する（上：549-551）。

ナチ体制での行動原理の解明は，それまでのナチス・ドイツ像を大きく変えるもので，現在のところこれに代わる説得力ある新たな説明は出されていない。ただここ十数年で，研究の焦点はナチ支配の構造や機能から国民のヒトラー崇拝と体制への同意の動機，国民統合の実態に移行しており，カーショーの解明した行動原理のメカニズムは権限拡大や業績評価を基準として動くナチ指導者・党カードル層，さらに国家行政機関の官僚層を説明する上できわめて有効で説得力があるものの，多様な国民の体制支持の動機説明にも妥当するのかとの疑義も出されている。つまりこの行動原理の射程距離と体制への国民の「統合」要因への問いである。それに対する有力な説明の一つが，ここ10年ほどナチス・ドイツ史に関する議論の中心になっている「民族共同体」概念である。

ここでは詳しくは立ち入らないが，カーショーは，この概念がナチスのプロパガンダ・スローガン用語であること，その内容が多義的で不明確であることなどから，「民族共同体」にはやや批判的だが，それがナチ体制下の包摂と排除を説明する上では有効であるとも評価している(16)。今後さらに検証すべき課題は多い

(15) ドイツ語では，„Dem Führer entgegen arbeiten“ で，これは英語で “Working towards the Führer“ と訳されている。直訳すれば，「総統に向かって働く」だが，本書では「意をくんで」と訳され，評者は「意を体して」と訳したこともある。これが本書の最も重要なキーワードであることは，たとえば2002年に彼の授爵記念に友人・教え子の寄稿した論文集の表題にこのキーワードが使われていることからも明らかである。Anthony McElligot / Tin Kirk (ed.), *Working towards the Führer,* Manchester UP, 2002.

(16) Kershaw, „Volksgemeinschaft. Potenzial und Grenzen eines neuen Forschungskonzepts“, *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte,* Vol. 59-1, 2011, S. 1-17. これにたいしてベルリン・フンボルト大学教授のヴィルトの応答がある。Michael Wildt, „Volksgemeinschaft. Eine Antwort auf Ian Kershaw“, *Zeithistorische Forschungen,* 8, 2011, S. 102-109. なおこれは論争といった性格のやりとりではなく，概念への疑義とそれにたいする説明であり，両者の間に基本的な対立はない。

が，筆者としてはエリート層の「総統の意をくんで」能動的に動く行動原理と，国民を広く動員・統合する「民族共同体」は，ともに体制を動かす機能において相互補完的に捉えるべきと考えている。その際，両者を媒介する役割を担い，民族共同体の中核となりながら，研究史では軽視されがちであったナチ党（大戦末期の党員は900万人である）と巨大なナチ分節組織・支援組織――国民の半数がどれかに所属した――の再評価を提起するノルツェンの研究は注目に値する(17)。こうした方向での研究が進展すれば，カーショーが解明したナチ体制の動員・統合メカニズムの全体像がかなりはっきりとしてくると期待される。

最後に，本書の訳語についていくつか指摘することで本稿の結びとしたい。ルーデンドルフは帝国陸軍主計総監とあるが，参謀次長である（上：221）。歴史的な位階や職名に関しては定評ある事典があるので，翻訳，論文などでは表記は基本的にそれに依拠することを提案したい(18)。第一次世界大戦でのドイツの賠償額が本文では「2兆2600億金マルク」，注では最終的に半減された額として「1兆3200億金マルク」とある（上：182，第5章注128）。英語のbillionの訳によるのであろうが，現在では英語でもbillionは通常10億であり，1320億金マルクである。細かいことだが，高校の世界史教科書にも記載されている数値なので訂正を求めたい。

なお，本書のLebensraumを従来の生存圏ではなく，「生空間」と訳したことに評者はやや違和感を持った（上：159，176以下）。Lebensraumは動物・植物学の系譜を引く用語でもあることから不適切と判断したのであろうが，ヒトラーはこの語を広域領土，大地・土地とほぼ同義語として使っている。本書にも出てくるハンス・グリムの『土地なき民』の土地もRaumであり，少なくとも同時代人にはそう理解されていたのではなかろうか。

(17) Armin Nolzenはハンス・モムゼンに学び，すでにナチ党史関係の多くの論考があり，ナチ党にもっとも精通した専門家と目されている。ただ学位論文をまだ完成させておらず，その出版が待たれている。彼はある論考で，民族共同体は実態としてナチ党とその傘下の関連組織のことだと指摘している。彼の論考を一つ挙げておく。Armin Nolzen, „Inklusion und Exklusion im ‚Dritten Reich', Das Beispiel der NSDAP", Frank Bajohr / M. Wildt (Hg.), *Volksgemeinschaft,* Fischer, 2009.

(18) 秦郁彦編『世界諸国の制度・組織・人事1840-2000』（東京大学出版会，2001年）。同書はかなり高価なので大学図書館での閲覧を勧める。